

古代の須恵器復元 よしもと しゅうほう 好本 宗峯 (本名 としかつ 年勝 一九三八～二〇二〇)

— 須恵器 碗 (ハソウ) の旅路 「唐丹の子供たちに届くまで」 —



二〇二四年 「生きる」

ハソウ寄贈に寄せて

『 生きる — 東日本大震災を経て、今思うこと — 』

釜石市立唐丹中学校 校長 金野 学



東日本大震災が発災した当日と翌日、それから約半年間の私の行動と周囲の状況を紹介します。

これを読んで、少しでも感じてくれるものがあればうれしいです。

東日本大震災が発生した2011年3月11日午後2時46分、私は大船渡市の越喜来中学校で勤務していました。翌日に控えた卒業式の準備と掃除を終え、3年生と一緒に体育館脇の外水道で雑巾を洗っていた時、突然大きな地鳴りとともに自分の体を含めあたり一面がものすごく大きく揺れました。頭上から割れた窓ガラスが降ってきて、体育館の中は天井の鉄骨や昇降式バスケットゴールが崩れ落ちてきました。校舎の方からは生徒たちの悲鳴が聞こえてきました。私は、外で地面の上にいたのですぐその場から離れることができたのですが、あまりにも揺れが大きくしかも時間が長いため、校舎内にいた生徒や先生方は無事避難できただろうかと心配になりました。校庭に出てみると、揺れが収まる前に非難を始め、揺れが収まったところには全員が校庭に無事に避難することができていました。ほっとして、振り返ってみると、校舎のいたるところに亀裂が入り、校庭にも地割れができていました。

ほっとしたのもつかの間、津波警報が鳴り響きました。越喜来中学校は浸水想定区域からは外れていたのですが、念のためさらに高台にある畑に移動しました。移動が終わって生徒の無事を確認した後、寒さをしのぐための毛布やバスタオル類を取りに学校に戻りました。

そして、それらを生徒に届けた後、今後の学習にと津波の様子を見に先輩の先生と2人で再び学校に戻りました。

校庭の端から海の方を見ると、学校から500m位先にあった小学校が屋根まで津波に飲まれていました。自分たちが立っているところまでは来ないだろうと高をくくっていたら、100m位先の4階建ての公民館の3階まで届きそうな勢いで津波が迫ってきました。慌てて学校脇の小さな水路沿いの道路を走って逃げましたが、途中で逆流してきた津波に追い越されました。幸い道路まで超えてくることはなかったので、何とかみんなが避難しているところまで逃げ切ることができました。一歩間違えればどうなっていたかわかりません。

それから少し待ち、暗くなってしまう前に様子を確認しに学校に戻りました。学校は浸水していませんでしたが、遺体安置所にするというところで消防団の方が体育館を片付けていました。机や椅子、落ちてきた鉄骨を取り払うとともに、遺体安置所にはふさわしくないと紅白幕もすべて取り外されていました。片付けが終わると、消防団のみなさんはまた捜索に戻りました。しばらくその場で待っていると、数名の老人が避難してきました。学校脇の老人施設が完全に津波に飲まれ、大きな被害が

出た中でかろうじて助かった数名です。一人は頭から激しい出血をしており、私は素手で止血をしました。学校から毛布、タオル類は避難している生徒に届けてしまっており、手袋もなかったので素手で止血するしかありませんでした。その方は苦しきのあまり、「おっ母、助けでけろ」、「死にでああ、殺せ」と繰り返していました。私は「大丈夫だでば」、「助かっから」と励ますしかできなく無力感を感じました。幸い、近くの診療所から避難してきた医師と看護師に処置していただき、この方は助かりました。それからしばらくすると、この体育館も危ないということで遺体安置所を別に場所に設置することになりました。

夢中で避難や学校で様々な対応をしていた間は考えず済んでいましたが、落ち着いてくと自分の家族と家が心配になってきました。実は、津波が来た直後は、我が家と隣にある実家は完全に津波に飲まれたな思っていました。妻と中学生1人、小学生2人、我が家の隣には祖父母がいますが、家にいたとしたらかなりの確率で駄目だろうなと覚悟もしていました。

その後、周囲の状況わかるにつれ、少しの生徒を残してほとんどの生徒が帰宅することができたので、校長先生から帰宅できる職員は帰宅するよう指示が出ました。大船渡市内の津波が来ていないところまでは車

が通れると聞いた私と先ほどの先輩は、残る先生方に申し訳ない思いながらも帰宅させていただきました。車は大船渡高校から少し先までしか通ることができませんでした。私たちは、抜け道があることを思い出し、滅多に通ることのない山道を進みました。山を抜けることはできませんでした。平地に出るとやはり道路は通ることができませんでした。ここからは、歩くしかないとまた山道（途中から道もなくなりませんが）に入りました。しかし、夜の12時を過ぎており小さなペンライトしか明かりがなく、防寒着も来ていないので途中で断念して引き返しました。それから近くの公民館で休ませてもらうことにしました。

明るくなり始めたあたりに再出発しました。津波が来た時間を考えると妻は職場にいるのではないかと思ひ直し、引き返しました。勘が当たり、妻の職場に着くと炊き出しをしていた妻に会うことができました。それからすぐに妻と二人で山を越え自宅に向かいました。我が家にたどり着くと、流されてはいなかったけれども1階が全滅でした。庭には近所の家や車が流されてきていました。家族は、祖父母と家にいた小学生6年の息子が近くの高い位置にある親戚の家に無事避難していました。しかし、中学生1年、もう1人の小学生4年の息子はいませんでした。

少し経つと、学校にいた中学生と小学生はそれぞれまとまって避難しているという情報がありました。そこで、近所の親たちとすぐに安否確認に向かいました。幸い全員が無事避難していました。避難所も開設されておらず食料の心配もありましたが、すぐに連れて帰りました。理由は、私の家のすぐ近くに地下水の水場があり、枯れたことがないからです。この時も枯れていなかったため、水の心配はしなくてもよいと確信があったからです。

その後は、3軒の家で93名が避難生活を始めました。親戚、他人関係なしです。私の地域では公民館、中学校、小学校が浸水したので人数が長期避難できる場所を作ることができませんでした。私は、1階は津波で泥だらけでしたが2階が無事だったので2〜3日で自宅に戻りましたが、多くの人は3軒の家に残りました。しばらくして、我が家の前にテント村ができたので、残った人の大半はテント村に移動し3軒の家での避難生活は解散しました。それから約半年後、私を含め家を失った人が仮設住宅に入居しました。

仮設住宅に入居するまでの間、避難した私たちは同じ釜の飯を食べました。避難所になった3軒の家の外に炊事場を作り、ここにいない近所の人の分も含め100人以上の食事を交代で作りました。材料は、初めのうちは各家にかろうじて残った食材を持ち寄りました。火は焚火です。毎朝5時くらいに火をつけ、朝食が終わったら男たちは山に焚き木拾いに行きました。太いものは斧で割りました。日中は、トイレが足りないから畑に穴を掘ろうとか、見えると恥ずかしいから囲いをかけよう、年寄りはやがむのが大変だから便座をつくろう、炊事場が雨ざらしだから屋根をかけようとかみんなで知恵を出し合い、サバイバルに近々ような生活をしました。夕食は夕方5時です。食べたらず火事を出さないように消えるまで火を囲み、星を見たりしながら語り合い、7時くらいには眠りにつきました。そのうち物資が届くようになり、火も焚火から薪ストーブになりましたが、生活リズムは変わりませんでした。なぜか、風邪もひかず、もめごとも起きず、体力があつて不思議な感じでした。

以上が、東日本大震災から約半年の私の周囲の状況の一部です。被害の程度やその後の避難生活、復興の様子は場所によって、人によって違います。また、感情も同様です。時を経た今思うことは、とにかく生きることの大切さです。もちろん生きていくためには苦勞があります。悩みや迷いもあります。しかし、生きているからこそ味わえる喜びや幸せがあるのです。私は生きています。ぜひ、皆さんも生きてほしいと思います。そして、平時でも有事でもとにかく「生きる、逆に言えば死なない」ために必要なことを学び、身につけてほしいと思います。

二〇二四年十月十一日

